

のびる

11

【ゲスト】冷泉貴実子 れいせい・きみこ

【ホスト】赤尾保志 あかお・やすし

【司会】草柳隆三 くさやなぎ・りゅうぞう

まえがき

医療と宗教そして心（有限と無限のいのち）との交わりを題目に置き、各界でご活躍の方々との対談は心踊らされるものがあります。

医療では、時間が経過するなかで、経験的法則に基づき裏打ちされた技術が、活用利用されています。肉体に対し侵襲性の強い作業が行なわれるのが医療行為であるためです。

宗教は、空間の中で常に現在形の言葉で多くの物事を言い表しています。A C 一三〇年クレルモンの宗教会議において、修道院内での医療行為が禁止されました。心と肉体との問題を分離した画期的なできごとでした。

この三つの題目である心・医療・宗教を当距離で論じ合おうと言うことには、この本に目を落としていただける多くの方々の問題提起を試みたいという思いがあります。夫々の専門分野の方々はその領域を超えて考える一助になることを願っております。

今回の対談を始めるに当たり、お力をお借りしたの方々にはこの紙面を通じて感謝の意を表したいと思えます。

平成二十一年三月吉日

赤尾保志

赤尾保志 対談シリーズ

の
こ
も
も

11

【ゲスト】冷泉貴実子 れいせいきみこ

【ホスト】赤尾保志 あかおやすし

【司会】草柳隆三 くさやなぎりゆうぞう

赤尾保志対談シリーズ第十一回、今回のお相手は、冷泉貴実子さんです。

冷泉家は、平安時代後期から、鎌倉時代にかけて、歌人として有名な藤原俊成、定家を祖に持ち、八百年の間、先祖の残した歌集や歌論、仕来たりなどを守り、継承してきた家系です。それらの文化遺産は、多く国宝や重要文化財に指定され、かつて、定家の別邸のあつた地の名を冠した、冷泉家の「時雨亭文庫」に収められています。

貴実子さんは、この冷泉家の直系のご息女として、「時雨亭文庫」の管理という難しい仕事をこなしながら、自ら講師として、教室を開き、伝統の和歌を詠む手ほどきをなさっています。

二〇一一年、夏、京都市上京区今出川通りにある冷泉家の一室で、お話を伺いました。この建物自体も、旧公家屋敷として、重要文化財に指定されています。

冷泉さんは、きつちりと和服を着こなし、そのまま、古の京の都にタイムスリップしても、さして違和感を感じさせないような、そして、様々な困難にぶつかりながらも、伝統を守り継承をしていく家に生を享けたという矜持が、大らかな振る舞いや端正な姿勢の中に滲み出ているようでした。



司会（草柳） 私ども、普通、和歌との出会いはと言いますと、ある一定以上の年齢の大人にとっては、子

供のころのお正月に、「小倉百人一首」でカルタ遊びをしたときが最初、という人が結構多いのではないかと思うのです。私も実はそうだったんですが、赤尾さんの和歌との最初の出会いはどうだったんですか？

赤尾 私には殆どそういう経験はなかったんですが、何となく耳にはしてきたと思います。五・七・五・

七・七という形は日本人にとって身近ではあると思います。歌の心持ちと言いますか、そうしたことにについては解っているつもりなんですが、身近だったかどうかと言えば、そうでもなかったですね。

定家の「百人一首」は最高の古典です

冷泉 「百人一首」は最高の古典ですね。これに勝るものは、源氏物語とか徒然草とか言いますけど、

あれよりもっとすごいのは、百人一首ですね。百人一首がもしなかったら、この国に和歌なんか一首も伝わらなかつた可能性はありますね。

司会 百人一首でカルタ遊びをしていた子供るときには、歌の意味も、誰が作ったものなのかも解らないままに、和歌というものに何となく親しみを感じていたのですが、この百人一首が、冷泉家のご先祖の藤原定家の編さんしたものと知ったのは、ずっと後でした。

藤原定家―（ふじわらのていか）、一一六二年～一二四一年。鎌倉時代初期の歌人。藤原俊成の子。「新古今和歌集」「新勅撰和歌集」などを編さんした。冷泉家、「時雨亭文庫」に収められている。日記「明月記」、歌集「拾遺愚草」などが国宝に指定されている。

「小倉百人一首」は定家の編さんによる私選和歌集。定家自身の歌は「来ぬ人を まつほの浦の夕 凧に 焼くや藻塩の 身も焦がれつつ」一首が入っている。

『俊成と定家は冷泉家の祖であり、大スターであった』（冷泉為人）

藤原俊成―（ふじわらのしゅんぜい）一一一四年～一二〇四年。「時雨亭文庫」に収められている 国宝「古来風躰抄」（こらいふうていしょう。歌論書）の著者。「千載和歌集」の編さん。

やまと歌は音（おん）がすばらしい

冷 泉 今でもそうだと思いますよ。百人一首の歌の解釈、あれはむずかしいですわ。解釈本がいつばい出てますけれど、一定ではないですし……。あんなもん、わからんでもいいと違いますか？（笑い）

それよりも、音（おん）が素晴らしいというほうが重要でしょうね。ほんとにむずかしいですわ、百人一首の解釈って……。

親しんでいる割には、たとえば「瀬を早み 岩にせかるる滝川の……」なんて、子供にはわ

からないでしょうけれど、はつきりしていることは、百人一首のこの音を聞いたときに、誰もがね、これを日本語だと思うことなんです。つまり、百人一首のどんなやこしい歌を聞いても、これはインドネシアの言葉や、とも、トルコの言葉だとも思いません。みんな日本語だと思っんですね。このことがすごいことやと思います。

つまり、わたしたちは、内容如何よりも、その言葉が伝わっていて、その言葉が何か、雅な日本の古の文化を伝えているんや、ということが、感覚としてわかる、というのが日本人の美意識であり、文化遺産なんやと思います。

司会

確かに和歌の場合には、百人一首に代表される歌の内容もさることながら、冷泉さんのおっしゃる音の要素ということが、大きな意味を持っているということなんです。

冷泉

そうですね。和歌は、大和の歌、と書くんですね。もともと歌うものだったんです。ところが今はね、和歌と接する機会があっても、ほぼ百パーセント近く活字を通してですよ。あるいは、筆で書いたものを見るという、目からの刺激でしかないんです。

もともと、昔から録音する技術があつた訳ではないから、音として残されているわけではありませんが、本来的に和歌というものは歌うものであつた、聞くものであつた、ということがあらためて、大事なことなんだな、と思っんです。

ここところが、現代短歌とは決定的に違ふところです。和歌は、歌うものであり、聞くものであつたということなんです。

司会 赤尾さんは音楽に詳しい方なんですけど、音として聞いても和歌というのはおもしろいものと思

いますか？

歌（音）の上に言葉が乗っている

赤尾 やはり、韻を踏むと言いますか、たとえば宮廷の音楽にしても十二音階くらいあって、多分、中

心になるのはドレミファでいえば、「ラ」の音から前後で曲をつけていると言いますか、謡という感じですね。ですから、確かに、おっしゃるように、歌と言葉が一緒になっている、歌の上に言葉が乗っているという感じがいたします。

*和楽器のチューニングは黄鐘調（オウシキチヨウ・十二音階のラの音）で大阪四天王寺内六時堂の鐘を二月の涅槃会（ネハンエ）と聖霊会（シヨウリヨウエ）との期間内で打たれた音を基音としている。「赤尾追記」

冷泉 世界の文化の発祥を見ますと、みんな、最初に絵があったとか字があったとか思うんですけど、

本当は歌だったんですね。歌がいちばん初めの芸術というのかな、それが文化の初めで、歌というのは結局、洋の東西を問わず、詩を読み上げることだったわけですね。

和歌もそうでした。定まった型にのせて歌いあげる、それが、本来の和歌やったと思います。そ

れをずっと伝えてきたというのかな。

それが、明治になってずいぶん変わったんですね。なぜ変わったかと言えば、結局、明治までは、この国には芸術という感覚はなかったんです。芸術というのは、文明開化とともにヨーロッパから入ってきた感覚で、その文明開化とともに入ってきた芸術というものは、自分というものを、個性を出すと言いますか、あなたと違う私という自我を大事にするということが、基本的な考え方だったと思います。

そうなるも、もう和歌も歌うものじゃなく、まさに読むものになっていくわけです。五・七・五・七・七さえも踏まないで、長い短いはあつたとしても、読みものに変わって行つたのです。

それまでの日本にあつた詩は、もともと歌うものであつたし、それと同時に、型の文化であつたわけですから、いつでも、春は梅に鶯だつたし、秋は紅葉に鹿でした。

それは、ほんとうに、梅に鶯が止まつて鳴いたかどうか、梅に鶯を見たかどうかということが問題になるんじゃないかと、梅に鶯と言つたときに、「あゝ春やなあ」と思う気持ちがまず基本にあつて、同じ季節をみんな味わうというのかなあ。同じ空間の中で、同じ季節感をともにする。そして、そこで春なら春、秋なら秋の喜びと一緒に歌い出すということが文化の基本だつたと思うんです。現代の短歌とはずいぶん違いますよね。

司会 そうした歌の基本とか型といったものが、今から八百年前、冷泉さんのはるかご先祖にあたる藤原俊成や定家の時代に、ほとんど出来上がっていた、ということなんですか？

和歌は型が大事、「古今集」が始まりだった

冷泉

そうですね。「古今集」で出来上がったんです。「古今集」というのは、すごく大きな存在価値を持つていたんですね。これに続く勅撰和歌集が、歌の世界では平安時代あたりの最高の文芸だったわけですが、スタートは「古今和歌集」だったんです。あとの歌は、何とかこれに近づこう、というのがパターンだったわけですね。このかたちは、そのまま江戸時代まで続くのです。

だから「古今集」に、出来上がった型があったということですね。あとは、その真似ですわ。もちろんその前に「万葉集」もあつたし、中国からの影響も受けたんですが、とにかく「古今集」で殆どすべてが決まった、と言っても言い過ぎではないですね。

「古今和歌集」——成立は平安時代の九〇五年。時の天皇の命によって編さんされた我が国最初の勅撰和歌集。千百首より成り、選者には、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑などが名を連ねる。定家の筆になる「古今和歌集」が、冷泉家の「時雨亭文庫」に収められていて、国宝に指定されている。

赤尾

今のお話の中に、中国からの影響、ということがありましたけれども、日本人が以前から持つていた言葉を漢字に置き換えると、なかなか意思が伝わらない、歌にもしくいということがあつたと思います。そうしたなかから、平仮名といいますが、きれいな形の字が出来上がって来た。多

分、それを歌に乗せるとすごく良かったのではないかという感じがしますよね。

ですから、平安の頃にできた平仮名的なものが日本人の心を捕まえて、日本の心そのものを写しだせる字としての表現ができるようになってきた、ということでしょう。

冷泉

もともと、日本的な「和」というものの文化すべては、結局は、四季の文化なんです。季節の型の文化なんですよ。たとえば謡にしてもお茶にしても、歌舞伎のようなものでも、結局はみんな季節を踏まえているわけです。

型の文化では、かならず梅が来て、その次には桜が咲くのですが、実際に、現実の庭を見ていればボケも咲きますし泰山木も咲くし、いろいろなものが咲くのですが、そうしたものはみんな、無視するわけですね。梅には鳩も雀も来るでしょうけど、鳴くのは鶯と決まっている、という型の中に「和」の文化が育まれてきたんです。

それが「和」の文化なんです。とても不思議なことだと思いますよ。そのことに今でも固執しているのは京都ですよ。

「道」が大きな意味を持っていた

赤尾

京都という街を、日本人の目から見ると、ひとつは「道」というものが大きな意味を持つてきたと思います。

冷泉

「道」ってどんな道ですか？

赤尾

道路です、人の歩く道です。日本の文化は意外と「道」でつながっていたんじゃないかと思えます。道を作る土木技術というものは、日本は昔から非常に優秀だったと思うんです。

古道が発見されて分かったことですが、道は大雨が降っても風が吹いても、道は形を成している作り方をされていたんです。そのなかで人口の交流が充分なされていた。だから言葉が地域ごとにはなくて、意外と昔から統一されていたんじゃないかと思うんです。

冷泉

おっしゃる「道」については異論があるんです。日本てね、いろんな言い方がされるんですけど、橋がなかった国です、ついこの間まで。戦略的な意味もあったと言われますけど、たとえば大井川って橋がなかったんですよ。背負われたり、台に乗せられたりして、川を渡っていたんです。道路について考えてみますと、イタリアではローマ時代にもう石の橋がありましたよね。なぜ、この時代に石の橋が出来ていたのか……。

赤尾

日本は奈良の大仏を造ったときに、七年か十年かかって建立されたということですが、当時の人口の三分の一ぐらいが奈良に集まったと言われているんです。そのためには当然道がなければ来られない。で、道を掘り返したら意外と上手に藁と土を積み重ねて造っているんです。しかも形を崩さないようにしているんです。

そういうこともあって、言葉というものは意外と統一されていたのではないかと思うんです。

冷泉

地域間の交流があったということですか。

赤尾

ええ、ですから日本人の心は言葉でつながっていて、それを上手に平安の文化が、平仮名を作りながら、そのまま残してきているのではないかと思えます。そういう感じがするんですけど、いかがでしょうか。

冷泉

万葉集には防人の歌とか、地方の歌はありますがけれど、古今集になるともう、地方を歌ったものは出てきません。律令体制の中で、地方に国府が置かれたわけだから、中央政府の考え方は地方にまで文字で伝えられた、ということはあったでしょうけど……。一般大衆はどうだったんでしょうかねえ。(笑い)

古今集などは、都の一部の人たちの宮廷の文化だったことは間違いないです。民衆のものではなかったんです。その感覚というのが江戸時代まで続いたのも、そこには、都の文化なのか、宮廷文化に対する憧れみたいなものがあつたのだと思うんです。

そして後になって、上方文化というものの質の高さを生んだんだろうし、それが広がって行ったんだろうということだと思っんですけど……。

宮廷文化というものに対する憧れみたいなものは続いたと思いますね。

司会

いわば、限られた宮廷という社会の中で継承されてきたからこそ、型として残されてきた、ということのようですが、その中で、和歌の型を確立したのは古今集というお話がありました。

そうすると「古今集」以降の歌は、たとえば「新古今和歌集」なども、みな同じ型を踏襲しているんでしょうか？

「古今和歌集」に見做った

冷 泉

「新古今集」のような「勅撰和歌集」は、ずっと室町時代まで続くんですが、時代は代わってもスタイルはみな一緒なんです。そもそものは「古今集」なんですね。どのように歌集を編さんしたか、というと、つまりその時代より古い歌と、そしてその時代の歌とを寄せ集めてきて、その中からいいものを選ぶんですね。

基準は春・夏・秋・冬・雑と、この分類で選んだんです。これはもうずっと変わらないんです。これがまさに、この国の文化の中心になってね、しかも、春と言っても流れがありまして、たとえば立春とともに氷が解ける、そして梅の香が漂う、鶯が鳴く、初霞ついでみが立つ、というように、春は春でも順番というものがあつて、これが「古今集」の時代に確立するんです。そしてこのことが、ずっと続いて来たんです。

「新古今和歌集」——鎌倉時代の初期に、後鳥羽上皇の命によって編さんされた勅撰和歌集。藤原定家は、家隆、寂蓮などともに、選者の一人として編さんに関わった。完成するまで、十数年の月日を要したという。この歌集では、西行の歌が最も多く選ばれ（九十四首）、俊成、定家の歌も数多く入っている。

司会 冷泉

歌集によって違いがあるとすれば、それはどういうところですか？

それは、その時代の編集者に拠るんでしょうね。編集者がどのような意識を持っていたのか、編集者の美意識の違いによって、それぞれの歌集の特徴は出てくるのでしょけれど、しかし、基本のところは「古今集」の考え方と少しも変わってはいないのです。

それは今でも、お茶の世界などにも色濃く残っていますね、たとえば、初釜のときには柳が活けられていて、お床には梅が一輪挿してあって、お茶杓の銘はといえば初音（はつね）、お茶碗は早蕨（さわらび）、というふうに決まっていますね。これが春を喜ぶするしだからです。ところが、同じ初釜のとき、庭に、きれいな菊が咲いているので、菊を活けておきましょう、ということになると、これはもう春の道具立てにならないわけです。

この文化を今も京都は続けているのであって、たとえば、お菓子やお饅頭などでも、年がら年中、おなじお饅頭ですけど、焼印を押してあるんですね。その焼印も一寸ずつ変えるんです。変えても変えなくても味はいっしょですけどね。

そこに、わざわざ、銘をつけるわけです。たとえば、初音とか驚らしい感じを出したり、桜のときなら、吉野山という銘をつけたりするんです。吉野山とついてもつかんでも別にお菓子に変わりはいいですけど、ただ、吉野の桜と思って食べられるかどうかということが、京都の教養というのか日本の教養の基本を成してきたわけですよ。

それで売っているのがこの土地だろうと思います。それが「和」ということやろと思います。こう

したことの基が「古今集」にあつて、ずっと守ってきた江戸時代までの宮廷の文化にあると思います。ところが、その後、宮廷文化を因習ととらえた明治政府が、何とかこれを打ち壊すことに熱中したのが明治以降の歴史だと思っています。

赤尾

そうですね。多分、平安時代に日本の文化が確実に成熟していたのではないかと思います。それが生活様式の中、とくに宮廷を中心はずっと続けられてきたのが、日本の伝統の一つの形だろうと思います。

*平安時代以降の日本は、文字文化を急速に発展させ、書物の数は世界的にみても一頭地を抜き膨大である。「赤尾追記」

赤尾

たとえば言葉にしても、私が生まれ育った東京近辺が標準語と言われているんですが、私は京都の言葉が本来は日本の標準語であるべきだと思っっているんです。これはもう少し声を上げてほしいんじゃないかという気がしています。

雅な文化と四畳半文化

冷泉

言葉に関してはそうでしょうけど、何て言うのかな、たしかに日本の文化は平安時代に確立したと思うんです。

たとえば西行のことにちよつとふれたいんです。西行は出家して、山の中の草深い庵で、散つて行く桜を一人見ながら暮らしている。それは一つの理想郷みたいな形で語られますよね。方丈記などもそうでしょうが、山居というのか、山の中で住むというのかな、そういう自然と一体となった生活をしてみたいという強い意志が働いているんですね。

西行（一一一八年～一一九〇年）平安後期から鎌倉初期にかけての武士、僧侶、歌人。俗名は佐藤義清、二十三歳で出家し西行と名乗る。歌人として数々の秀歌を残す。よく知られた歌に「願わくば花の下にて春死なんその望月の如月の頃」などがある。

冷泉

でもね、わたしは思うんですが、それは永遠の理想郷で、現実はそのようなんじゃないですよ。誰も現実にはそんなことしないんです。それがまた日本のすごく変わったところや、思うんです。

たとえば、お茶でもね、そこでは何とかして自然と一体化しようと、わざわざ、四畳半の小さなところに入って、芝垣を築き、大自然の草花を植えて、という風に造るんです。それは山の中の庵に住みたいという気持ちがあるからなんです。

本当は、山の中が一番いいと思っっているんです。でもね、結局、その真似をするのが好きやっただけで、誰も現実問題としては、山の中には住んでないですよ。どうしたかと言えば、大豪邸の中にわざわざ四畳半を造って床の間にちよつとだけ、すすきを挿したり、垣根だつてわざわざ枝折戸のように造ってみたりして、いかにも山の中のように見せるのは好きだった。けれども、決

冷泉

して本当に山の中には住んでないんですよ。

これがわたしは、日本人のすごく不思議なことや、思うんです。でもね、それが今ちよつと間違つて言われているんじゃないかなつて思うんです。というのは、わび、さび、というのはお茶のメインターマでしょうけど、これが日本の代表的な美であるというふうに言われてきましたし、今もそう思う人はいると思うんですけど、これは豪華な家の中に入った一部の話なんですよね。

メインの雅な世界、ある種豪華な華やかな世界があつたのに、そこに飽き足らない人が、わざわざ四畳半造つて、草花を植えただけです。

こちら側には雅な華やかなものがあつたのに、こちらを忘れてしまつていゝるんです。そして、四畳半の文化だけが日本の文化だと思ひ續けて来た、という間違いが世の中にはあるんじゃないかなと思ひます。

それはね、とくに戦後、日本人が日本の文化を否定したなかで、外国人によつて再発見されるわけですよ。そのときに、ミステリアスなもの、神秘的なものに焦点があつた。その神秘の一つがお茶であり、禅であり、能であつたと思ひます。だから、それつて、一方で雅な生活があつたのに、こちらの方は戦後、天皇の戦争責任の問題もあつたでしょうが、誰も顧みなかつた。そして、もう一方の文化だけが大きくなつてしまつた、というのが今の日本の文化の不幸なつて気がします。

もう一度言いますと、昔からだれも、山の中には住まなかつた。あれは一種の自分たちの心の中

の喜びの世界であって、だれもいっぺんも山の中に住んだ人はいないですよ。豪華の中の暮らしには飽き足らずに、山の中の庵のようなものに住みたかったというのが、日本の文化じゃないかなと思います。

日本は文化的には裕福だった

赤尾

わび（侘び）とか、さび（寂）、しおり（撓り）、というのは、たとえば月でも、雲間の月でないといわれないということでしょうし、天目茶碗は中国で評価は低いけれど、日本では、そこにわび、さびが入って来て、高く評価するということがありますね。味わいを増すものを求める、と言いますか、そういうことがあります。

こうしたことを考えますと、日本人というのは、文化的には、意外と裕福だったのではないかと思います。一方で、ちよつとしたことにも、わび、さび、しおりのなものを、一つの文化として取り込んで、それを楽しんでしまう、というところがありますね。

冷泉

片方だけの価値が大きくなるのは間違いだと思います。アンバランスだと思えます。わびの恰好をするのは、お茶室に入るときはそれでもよかったですけど、こっちは違うのだと思うんです。

今は、短歌の世界というのは、自分が経験したことのないことは読まないわけです。自分が恋をしてからでないと、恋の歌は読みませんし、失恋しないと失恋の歌は作らない、ということでしょう。

ところが、宮廷で行われてきた歌会というのは、いつも、「題」があったわけですよ。

多くの場合、それは行事と関係がありました。たとえば新年の歌会だったら、とりあえず、お正月に新年を寿ぐというのが第一義ですから、新年を寿がない人は来ないんです。喪中の人は来ない、ということなんです。一周忌の歌会だったら、みな、悲しいということが基本で、こういうことは歌会成立以前の共通認識なんですよね。

ところが、今の歌会になると、もう「題」もないんですけど、とにかく今の自分を表現するということですから、自分の気持ちをそこに投影するということが、歌づくりの中心なんです。

昔の歌会は、いま言ったように、お正月はめでたいわけです。今は、お正月来てもめでたくないとか、お正月はキライだと言うのも自由ですけど、昔は、絶対、それはないわけですね。儀礼的、形式的かもしれません、そのところに大きな差があると思うんですね。

でも今は、みんな、自分を主張することがまず、第一番やって、学校でも教えるし、あなたとわたしは違うのだということが、スタートになっているんです。違わなくっちゃいけないって、そう教えまくっていますもの。これ、やっぱり違うのかなあ。もちろん、違うからと言ってイジメるのはよくありませんけどね。(笑い)

司会

個性を大事にするということは、とても大切なことだと思うんですが、冷泉さんのおっしゃっていることは、和歌のように、文化にはまず、型があって、その型やスタイルの成熟の上に個性というものは成り立つのだ。ところが、今は、あまりにも型をないがしろにし過ぎているのではない

か、ということなんでしょうか？

型を大事にする伝統文化

冷泉

そう思いますね。というよりも、よく言われますが、これからいよいよ国際化ということになれば、やはり、自分というもの、自分の国というものを、大切にしないといけないし、それが解らないと何もスタートしないって。

そのときに、じゃあ、日本の文化って何か、と言われると、結局はそこに、つまり型を大事にする文化に行きつくのではないかと思えます。それは四季の美を型でもって共通のものとしてきた文化。それが「和」の根本かなって思います。

赤尾

それは、言葉、あるいは、言葉があると言ったらいいのか、日本人の気持ちを言葉に乗せて四季折々を上手に表現しているんですね。少しは遊び心も含めて……。

冷泉

言葉に乗せて、ということ、それが基本なんですけどもね。でも、言葉ではなくても、絵でも、お正月の年賀状などで、梅に鶯が止まっている図柄などがありますやん、あれは元々和歌から出たものですけど、あれを見ていると別に言葉が介在しなくても、これは春や、ということを読みとっています。

ただね、わたしがとても不思議に思うのは、わたしは京都しか知りませんから、たしかに梅に鶯

なんです、春というのは。日本は沖繩から北海道まで、広いですから、梅に鶯が来ないところでは、どういうふうに思うのか、そんなこと、まったくおかしいと思うのか、それはわからないです。でも、もしかしたら、「和」を考えると、おんなじように思うのかしら。それとも、やっぱり、「梅に鶯」が、なぜ春なの？と思うのでしょうか。

でも、もし京都というものが、日本の文化の一つとして生き続けるならば、「和」の根本はそこにしかないと思います。

司会

たしかに、多くの日本人は京都の文化について、ある種、特別な思いを持って見ているということはあると思うんです。

その文化の核になっているのが、俊成や定家の時代に確立された和歌の道、なのだというお話もありました。以来、八百年、ずっと冷泉家は今日に至るまで、和歌という財産を守り、継承してきているわけですよ。一口に八百年と言っても、その間、様々なことがあつた訳ですから、守り続けるのは大変だったことでしょうね。

冷泉

こんなに長く、八百年も続いてきたのは何故なんでしょうね、とみんな言やはるんですけど、長く続けてこられたのは、ただひたすら、「罰あたる精神」、やったんです。

「罰、あたらない」ように伝統を守ってきた

司会 罰あたるって、それ、どういふことですか？

冷泉 罰があたる、というのね、つまり、ご先祖は神さんという意識ですわ。これはぜひ言っておきたい話なんですけどね、今はこうして冷泉家に伝わる文化財も公益財団法人になる時代ですから、日本中で今、文化財保護に反対する議員はいないですよ。文化財を大事にするというのは当たり前と、みんなが思っていることでしょうけど、でも、変わってきたのは、ここ五十年くらいですよ。

戦後すぐの頃は、文化財を守るなんて考える余裕は誰も持ってなかったんですね。明治維新の時代のように、廃仏毀釈とか、そういう大きな波があつて、日本のものはまったく否定された時代があつたわけです。

たとえば天皇さんでも、もともとは衣冠束帯だったのが、今は洋服になつていふように、それはまあ、一つの革命だったんだからしょうがなかったと思えますけど、こういうことが、わずか五十年、百年の間にも起こっていたのですから、八百年という長い間には、変革は何回もあつたはずなんです。

そういうなかで、残し続ける力というものは、わたしは「罰あたる精神」だったと思うんです。

つまり、これは神さんなんや、神宿るものだから、これを捨てたら罰あたる、ということ。ここですわ。これって、日本の文化財を守ってきたキーワードだと思えます。

結局、今でも残っている文化財って、多くは、お寺か神社のものなんです。本来はもつと、商人の家にも町家にも武士の家にもあつたはずですよ。でも残らなかつたんです。何故かというところ、罰があたらなかつたから（笑い）。罰があたるものだけが残つたんです。神さん、仏さんと思つたものだけが残つた。

冷泉家の場合も、なぜ文化財として残つたかと言えば、捨てたら罰があたるからですわ。冷泉家には、もとは蔵が八棟あつたんです。ただ、ここは地の利が良くて便利ない場所ですから、税金がすごく高かつた時代があつて、もし、税金払えないのだつたらここを処分して、もつと住宅を建てた方が国民のためになるという考え方が、国策として、はつきりあつたんです。何故住んでいるのか、出て行けというようなことが、そんな時代があつたんです。

そして、実際、蔵の中のものが出て行っているんです。残つたのは神さんの罰あたる二つの蔵だけだつたんです。だから、私どもが今持っている国宝五件、重文四十七件のなかで、「古今集」などもし値踏みすれば何億にもなるものですよ。いまでも冷泉家としては、お金に苦労していて、もし換金することができるなら、楽になるだろうな、と思うことがいっぱいあるわけです。

仏さんを守っているお寺でも、自分の御本尊さんを換金するなんて考えないですよ。これ、何千万円になると思つたとたんに、守ることができなくなる。拝むからこそ守れるのであつて、これ

が五千万円やと思つたら、押んでいられないですよ。そこがわたしはキーポイントやと思います。冷泉家が、八百年、文化財を守つてこられたのも、そういうふうにしてきたからだと思います。

歴史の中で乗り越えてきたピンチ

司会

八百年の間には、政変もあつて、体制が引っくり返つたこともあつたわけですから、ピンチはたくさんあつたと思うんです。しかし、冷泉家に伝わる有形無形の財産を守り続けるには、その時々、守り役が賢明な選択をしてきたということもあるんでしょうねえ。

赤尾

賢明な選択をするだけの文化人がおられた、ということだろうと思います。そのためには、何と表現したらいいのか、トポロジカル的な、位相数学的な連続性と言いますか、その時々、連続性の中に位相は持つていたとしても、それを残していくという、そういうものの考え方がないと八百年、千年という時は重ねられないだろうと思います。

とくに、京都という街は、平安京ができてから千数百年経つと思ふんですが、今の京都をどういふふうに表示しますかと言われたら、すぐに、思いますのは、京都の街というのは、群青的な色をしているということなんです。それもですね、千数百年経つてますから、だいぶ焼け焦げた、月の光とか、太陽の光とか風とかによつて、街全体が焼けている、その素晴らしい色があるのではないかと思います。表現的にはね。

ただ焼けているわけじゃなくて、色を出すために焼けて来た、別の力によって焼かれてきた、それが今の京都だと思っんです。そして、これからはもつと焼けて行くだろうと思っんですが、その素晴らしい姿をどなたが残して行くんだろうということだと思っんです。

それが伝統であり歴史であると思っすけどね。そのなかに矢張り、おっしゃるような「和歌」というものがあるわけで、「和」という考え方が連綿として続いているのかなと思っんです。そこに、日本人の心というものが、なんとなく映し出されている。そこを日本人がどう表現するか、「私の心は水面に映ってます」とかね（笑い）、そういうこともあるでしょうね。そういうところに日本人の奥床しさと同時に、豪快さがあるのじゃないのかな、という感じですね。

定家以後、冷泉家に天才はいなかった

冷泉

わたしはね、いまの話のなかで、有形無形のものを守り続けてこられたのは、その時々々の賢明な判断があったからだということがありましたけど、たしかにそれはあったと思っんです。そこで、わたし、もう一つ思うことはね、代々の冷泉家には、天才がいなかったということなんです。俊成、定家は天才でしたけど、そのあとは、天才がいなかったんですね。鈍才もいませんでしたけど……。

天才というのはね、前の価値を打ち壊して自らの価値をうち立てるものなんです。冷泉家には、

そういう天才がいなかったんです。つまり、みんな凡人だったんです。でもね、それはほんとの凡人じゃなくて、言ってみれば、二流ではないけど一流ではないというか、つまり、もっと新しい価値を見出していかなければいけないだろうと思うんですが、そこまでは踏み込まない。良識人というんでしょうかね、俊成、定家以降は、そういう人たちが続いたんだろうと思います。これは、すごい重要なことだと思うんです。

ほんとの天才は何億か何十億人に一人ぐらいしか出ないと思うのに、今、学校教育では、子供はみんな天才や、言いますやん、あれはちよつと間違っているんじゃないかと思えますね。みんな天才だから、何とかしてその子の個性を伸ばしてあげなければいけない、と言いますやんか。ほんと、そうは思いますけどね、思うけど、天才というのは、そうそういるわけではないから、もつと良識人になるための教育というのを根本的に考える必要があるのではないかな、と思いますね。

天才ではないけど二流でもない

赤尾

日本人というのは、よく考えてみますと、天才ではなくても、おっしゃるように、二流でもない、と思うんです。その厳然たる事実としては、漢字をこよなくこなし、カタカナを使い、平仮名まで使いこなしてしまう、なおかつそれらを混乱させないで、日常生活の中で使っているわけです。

三つのキャラクターを混在して使っている民族は、日本人だけです。ですから、世界から見ると日本人は、ずいぶん天才じゃないかと思うかもしれないかもしれませんが、日本人自身は、三つのキャラクターを同時に使えることが、それほど天才的なことだ、などととは思っていないわけです。

三つのキャラクターを使い続けて行くことのできる民族であるということ、これは非常に重要なことだと思えます。

冷泉 そう思いますね。漢字を発明した民族ではないということですよ。だから天才じゃないけれども、決して愚人もいなかったわけで、そこで産み出した価値観というものを、はっきり認めた方がよいのではないかと思えます。

赤尾 これは私自身の意見なんですけど、日本という国はアジア全体から見ますと、東側のいちばん端に位置していて、それから先は海で、つまりアジアのどん詰まりのところにあるんですね。ここでこれだけ素晴らしい文化をつくりあげた民族は、世界広しと言えどもあまり見当たらない。見当たらないことを気づかないで、これからも過ごして行く日本であった方がいいのかなと、思うんですね。(笑)

冷泉 そうかも知れないですね。

赤尾 とくに国際化すればするほど、こういう小さな文化というのは呑み込まれて行ってしまいう可能性がありますので、逆に、それを守るためには、小さな文化を守りながら世界との和を必要とするんですけれども、独自のものを残しておくという、そういう器用さを持っていた方がいいと思います

ね。

司会　なぜ、八百年という長い歴史の中で、貴重な財産が残されてきたのか、守り続けられて来たのか、という先ほどの話なんです、その時々賢明な選択があった、ということのなかには、俊成、家定をはじめとして、政治とはある一定の距離を保ってきた、ということもあつたようですね。

政治とは一定の距離を保ってきた

冷泉　その通りだと思いますよ。たとえば、冷泉は明治維新のときにも東京に移ってないんです。そのことが冷泉家が残つたという一つの理由でもあるんです。尤も、この家がもう少し御所の近くにあつたなら、当然、なくなつていたんでしょうけどね。

ともかく、東京に行かなかつたということが、この家が残つた大きな理由なんです。いろいろな要素があると思いますけれども、冷泉家が東京に移るほどの地位ではなかつたことも、すごく大きいんです。

そこまで高い位の家じゃなかつたということなんです。たとえば、五摂家の家のように家格が高ければ、たとえ当主が何と言おうと、東京について行かざるを得ないと思うのです。あるいは、岩倉具視みたいに、意見をきちんとして持っている人なら行かざるを得なかつたと思うんです。そういう

意味では、冷泉家は凡人だったんでしょね。

まあ、ただそれだけじゃなく、定家さんの言葉で、「紅旗征戎（こうきせいじゅう）は我がことにあらず」というのがあるんですが、意味は、朝廷のもとに兵をあげて戎を撃つ、というようなことなんです。定家の日記である「明月記」のなかにある言葉なんですけど、政治なんて、そんなことは私の知ったこっちゃない、と定家は言ってるんです。

それが、藤原定家という人の立ち位置を表わしているのだ、ということは、よく言われるのですが、そういう政争には与しないで、私は、歌の道を行くんだという、一つの宣言なんやということでしょうね。定家の後もずっと、冷泉家では、家訓として言われてきたことなんです。

でも、政治家にはならへんかった、と言いながら、みんな官吏ですからねえ。ずっと官吏で、後に明治になって貴族院議員になった人もいますし、いろいろですけども、己を知っていたということかなあ。それは大きい意味があつたことだと思えます。

一流と誤解して、時の政府に与していくようなことはなかったお家でしょうねえ。でもまあ、一流の人って少ないですよ（笑い）

司会

冷泉家を守り伝えてきたものは、俊成、定家以来の、歌集や建築物のような有形のものだけでなく、生活の中の行事とか仕来たりとか、無形のものも、たくさん貴重なものもあるわけですから、これを残していくということは大変でしょうねえ。

冷泉家の無形文化財

赤尾

四季折々と言いますか、たとえば、今の季節の七夕もそうでしょうけれど、お祭りというのが非常に重要な意味を持っているのですから、これからも、それが守られるような国になっていってほしいですね。

冷泉

わたしも本当にそう思います。それも結局、みんな罰あたるんですけどもね（笑い）。なんで行事が残っているかというと、やつぱり、みんな罰あたるからなんですよ。結局みんな神さんと関係ある話ばかりなんですけどもね。

この間のお盆の時期などには、ほんとにたくさんさんの行事が日本には伝わっているんですよ。多分、世界にもまれなことだと思えます。こんなたくさんに、神さん、仏さんがらみの行事が残っている国というのは、やつぱり文化が高いんだろーうと思えます。わたしは、中国がそうだと思っていたんですが、今や山岳民族の中には昔からの行事が残っていても、街中には、祭りと呼んでいいようなものは、何にも残っていないらしいですね。

日本では、どんな山の中に入っても、海辺でも、小さな祭りもちゃんと残っているんですね。こういうのを見ていると、日本はなかなかのものだと思えますよ。

赤尾

ほんとにそうです。そういう意味では、文化度の高い民族だと思いますね。

冷泉 でも、東京からは、徹底的になくなってますよね（笑い）

赤尾 住所変更で現代化してしまった部分というのが大きいと思います。昔残っていた街並みの名前を

そのまま残しておければよかったですよ（笑い）。それをどうやって、もう一度時間をか
けながら、日本人の知恵として元に戻していくか、それも一つの教育だと思います。

冷泉 そうかも知れませんね。

それにね、どこそこで、リオのカーニバルの出来そこないとか、神戸で何とかかやってますで
しょ、あれなんて絶対続かないですよ（笑い）。何年かは続くでしょうけど。結局、神さんの罰
あたりませんから潰れるんですよ、お金がなくなったときに……。行政もちよつとは、考えてほ
しいなと思いますよ（笑い）。

それに対して、ちよつとした街角で、お地藏さん祀ってたり、こっちの街角では送り火焚いたり
しているのを見ると、ほんと、すごいなと思います。東京も、もうちよつと何とかしてほしいわ
（笑い）。

司会 年中行事にしても、和歌の伝統にしてもそうでしょうが、長い間、守り続けているというのは、
当事者の冷泉さんにとっては、有形無形の重荷になっている、ということはありませんか？

冷泉 じゃまくさいですねえ（笑い）。

この間も乞巧奠（きっこうてん）をしたんですけどもね。

司会 「きっこうてん」て何ですか？

罰当たるからやめられない「大文字」

冷 泉

七夕のお祭りです。今までは家でしていたんです。段々、有名になってきますとね、見たいとおっしゃる方が増えてきますでしょ。毎年、二百人ぐらいは呼ぶんです。入りきれないんですよ、最近。この間は、府民ホールをお借りして二回に分けて、千人の人が見に来ました。しんどいですよ。なんや、人のためにやっているのかな、と思ひましてね（笑い）、どうしても、ショーアップしてしまうんです。

ショーアップが悪いことかどうか、それは分かりませんが、あえて、誤解を恐れずに言えば、この間の「大文字」で、つくづく思ったことなんですけどね。

あの時、東日本の大震災で被災した地域の木を薪にして、燃やすとか燃やさないとかいうことがあります。京都市長さんが介入して、結局あげくの果てが、放射線が検出されてダメになったという、あの一連の出来事なんですけどね。もちろん、みんな、あの震災には心を痛めているし、復興を願っているし、もちろん当たり前のことなんですけどね。

薪かついで山登って、この暑い時期に、火い焚くわけですが、わたし等は子供のときから見えますから、自分の祭りと思つてますけど、たんに見ているだけなんですよ。あれやっている人というのはね、自分たちの心が済むように、自分たちがそれこそ信仰で、罰当たるから、やってはるだけで

ね、それをわたし等が見て、ごちゃごちゃ言ってるだけの話なんです。

だから、市長が何を言おうが、知事がどう言おうが、あの人らには関係がないと、わたしは心から思います。山に登って火を焚く人たちは、自分たちは自分たちの祭りを、去年もやったし、一昨年もやったし、ずっとやってるから、ただやってはるだけの話でね。

それを見た人が、何と思おうが、震災があったからどうか、ということとは違うと思うなあ。だってそんなこと言い始めたら、ついこの間は原爆も落ちたじゃないですか、京都が丸焼けになった応仁の乱もありました。みんなそれを乗り越えてきているわけですよ。大阪丸焼けになったから今年はずめとこか、なんて思わなかったわけですよ。

とりあえず、続いているんですよ、五百年とか六百年とか。続いているということは、結局、重荷もあつたでしょうけど、自分たちが、ただだんに、去年と同じように今年もやりたいと思つてやつているだけのことでね。それを第三者が、こうせいああせい、言うのは、すごい間違いだと思えますわ。この間の「大文字」の一連のことをみて、つくづく、そう思いました。

祇園祭などもね、重荷と云えば重荷だと思えますけど、あんなごつついもん、何億円かかってますやろ、行事そのものがね。祭りじゃないときに、あれやれ言われたって、誰もやりませんよ(笑い)。家の前にも、すごいお神輿さんが毎年来るんですけどね、何トンもあるようなお神輿を担いでいるんですよ。お金払ってでも、毎年、かついでいるんです。あんなもん、普段やれって言ったって、誰もやりませんよ(笑い)。

今は、何かやれって言えば、いくら呉れる？という世界なのに、神輿はお金払って担いでいるんですよ。それ考えると、信仰の力ってすごく強いと思うし、重荷だからこそ、やってはるんやと思います。やらな、明日が気になるからやってはるんやろうし、おじいさんもやってはったから、孫もやるんでしようし、その自然体がいいんでしようね。

大文字（だいまんじ）——山上で薪に火がつけられ夜空を焦がす姿は、祇園祭と並んで、京都の夏を彩る風物詩。こうした送り火は各地で行われているが、京都東山の「大文字」が最もよく知られている。二〇一一年夏の「大文字」では、三月に起こった東日本大震災で亡くなった人たちの鎮魂の意味を込めて、被災地の木を薪にして欲しいという願いが寄せられたが、木が放射線を帯びていたということから、いったんは燃やすことになっていたにもかかわらず、決定はくつがえされ、結局、被災地の願いは東北に戻された。

送り火は、もともと、精霊を送る意味をもった宗教的行事であった。

司会

そうした伝統的な行事とか仕来たりとかを残していくためには、偉大なるマンネリズムで結構、という気持ちを持つことも必要なんでしょうか？

陳腐、マンネリこそが京の文化

冷泉 もう、めっちゃくちや大事です。マンネリであって、意義を考えないこと、それから不条理を受け入れること。めっちゃくちやな不条理ですよ。あんな何トンもあるようなお神輿さんを、ふんどしひとつで担ぐなんて。あれに理解をほどこす解説なんてないですよ（笑い）。

この暑いときに、薪担いで、山に登って、火いつけるなんて、なんちゅうことかということですよ。それは、まさに理屈ではないですわ。重荷でしょきつと、やられる人は。来年もまた、やらなあかんと思つて、ぞつとしてるでしょ。

司会 和歌の道も然りですか？

冷泉 そうやと思います。やればいいだけのことでですよ。だって、創造するんじゃないもん。去年やったことと同じことをやればいいだけのことですもん（笑い）。ある意味で簡単ですよ。

司会 冷泉さんのお書きになった「冷泉家歌ごよみ」のなかで、冷泉和歌は陳腐だ、とおっしゃっているのを見て、ちょっとびっくりしたんですが、その陳腐が実は大事なんだと……。

冷泉 うん、陳腐がすごい大事なんですよ。あんな「大文字」だって陳腐ですよ、毎年毎年、同じことをして……（笑い）。超陳腐。その陳腐がすごいんですよ。

でもわたしたち、あまりにも新しいものに価値があるんだと、思い込んで来なかったかなあ？

赤尾

そうですね。京都の街の持っている、日本の歴史的な、おへその部分をどうやって大切にするか、これは大きな問題になるだろうと思います。そのためには、問題にしないことが一番いいことだろうと思います。で、ずっと続けて行く……。

問題にされると、何かを変えなければいけないと、余計な心が疼くんです。

冷泉

だから、あんまりややこしいこと、言わんことですな。黙って、お金出すことですわ（笑い）。これ、すごい重要。お金がなければ始まらないから。「大文字」でも、どうしても京都市の意見に従ってしまうのは、お金がないからですよ。お金がたくさんかかって、京都市からの援助が出るから、しょうがなくて市の言うことを聞かざるを得ないところがでてくるわけですよ。

だから、続けてほしいと思うんやったら、行政も黙ってお金だけ出す、やる方も黙ってそれを受けて、毎年、おんなじことをやるようにすればいいんです（笑い）。

司会

ところで、冷泉さんに、あらためてお伺いしますが、冷泉さんにとっての俊成、定家という人は、どういう存在なんですか？

俊成、定家は神様だった

冷泉

わたしなんかは、子供のときから、ここはシュンゼイキョーとテイカキョーがいらはる蔵え、とさんざん言われてきたから、そういう神さんがいはるんやと、思っていたんです。シュンゼイキョ

「、テイカキョウという名前の神さんやと思っていたから、あまりにその印象が強すぎて、二人を人間として見る目はあまりないですね。」

学者には学問の対象としての俊成であり定家でしょうけど、そのことと、わたしの中にある俊成卿と定家卿とは違うような気がしますね。あれとこれとは、一緒にならんという感じ。

司会 そうですか。神様ですか。

冷泉 そう、そう、神さん、神話の神さん。

司会 冷泉家が俊成、定家以来、守り続けてきた「和歌」の心・いのち、というのは、結局、何だったんでしょうか？

和歌の心は、言葉の美

冷泉 うーん。昔のことは分かりませんが、今、わたしが教えていることは何や、と聞かれたら、やっぱり、言葉の美？かな。使われてきた言葉の美。美しい言葉。日本に残された美しい言葉。

赤尾 日本語の元々を辿っていくと、母音が三つぐらいしかないとわれているんですね。たとえば、日本語にも残っていますが、チャランポランとかね、こうした言葉は中央アジアの方の古代チュルク語の中にあつたものが、日本に入ってきて来てそのまま使われているんです。チュルク語も母音は三つぐらいですから、ということからすると、多分、日本語の母音も、元はそのくらいかもしれませ

ん。

単純であるから美を感じるということ、複雑であればあるほど美を感じない、ということがあ
るんじゃないでしょうか。

先ほど申し上げたトポロジカルもそうかもしれません。数学的に複雑なように見えるんだけど、
連続している姿は実際には非常に単純であると、そこに美がある。大和絵などもそうです。連続的
なものだけれど、そこに美が残っていることがわかります。

わたしが思っている言葉の美というのは、母音とかそういうものじゃなくてね、たとえば、今は
秋だから、露の白玉だとか、玉の白露とか、鈴虫すだく、とかね、尾花が袖とか、それが和歌の言
葉の美だと思うんです。

昔は、みんなが、こうした言葉を美しいと感じていたんでしょうが、でも今は、日常から、こう
いう言葉は消えてしまった。けれども、「露の白玉」と言われたら、見たことはないけど、何かそ
こに美を連想する力がありますよね。言葉の美、というのは、それかなと思います。

そうした言葉の美、これが、冷泉家が守ってきた和歌のこころ、だと思っているのです。

「了」



あとがき

これだけ長きに亘り、都として多くの民が住み、毎日の生活を営んでいる場所は世界広しといえども希有なことである。

ひらがなとしては醍醐天皇が表わした公文書的な意味をもつ「古今和歌集」にあると云われているが、その一代前の宇多天皇の宸筆に、草仮名・片仮名・声点や平古止点として表わされている。

冷泉家には「土佐日記」(紀貫之)の最終帖を藤原定家が臨模したものが伝存。その他多くの書物等も時間の経過とともに失われたものもあるが、貴重な書物だけ残されている。日本人として日本の文化を通して後世へ受け継いでゆかなければならない。百人一首に勝るものはないと冷泉さんはおっしゃっておられます。貴族文化の栄華を知ることには日本人の心を知るに等しいものであると考えます。百人一首をもう一度手許に置いて古人の気持ちを考えてみたいと思いました。

赤尾保志

【ゲスト】冷泉貴実子 れいせい・きみこ



冷泉家二十五代・為人夫人

昭和二十二年（一九四七年）冷泉家二十四代・為任

布美子の長女として京都市に生まれる

京都女子大学大学院修士課程修了（日本史）

公益財団法人冷泉家時雨亭文庫 常務理事・事務局

長として冷泉家に伝わる文化財の継承保存に従事して

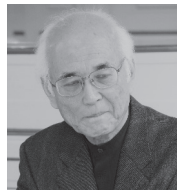
いる

冷泉流和歌の教室を主宰

近著に「花 もみぢ（冷泉家と京都）書肆フローラ

二〇一一」などがある

【司会】草柳隆二 くさやなぎ・りゅうぞう



1937年 神奈川県生まれ。
1961年 NHK入局。「新日本紀行」などのナレーション番組、教育テレビ「こころの時代」などインタビュ番組を担当。
1994年 定年退職後は、フリーアナウンサーとして、言葉に関する講座や、研修業務に従事。

著者略歴

赤尾保志



あかお・やすし

1943年、川崎市生まれ。
1968年、慶応義塾大学卒業 東芝機械(株)入社
1978年、財団法人聖マリアナ会 評議員
オリックス・レンテックを経て(株)トライアックス設立
2003年、財団法人聖マリアナ会理事
2005年、同会理事長

赤尾保志 対談シリーズ「いのちを語る」 第十一回

対談日 二〇二一年八月十八日

京都市上京区今出川通「公益財団法人冷泉家時雨亭文庫」にて

ゲスト：冷泉貴美子 ホスト：赤尾保志 司会：草柳隆三

発行……………二〇二一年十月十日

発行者……………赤尾保志

発行所……………財団法人聖マリアンナ会

〒二一六〇〇〇三

神奈川県川崎市宮前区有馬四一七―二三

電話 〇四四（八五二）一三三七三

<http://www.st-marianna.com/>

企画・構成……………草柳隆三

事務局……………宗像章

造本……………石井貴美子

印刷所……………株式会社技秀堂

バックナンバー閲覧 <http://inochiwokataru.com/>

定価 二〇〇円

おのち
のち

赤尾保志 対談シリーズ

11